[道　　徳　　科]

道徳の授業改革

お茶の水女子大学付属小学校

渡　辺　　敏

Ⅰ．はじめに
4つの実践報告とその考察
Ⅱ．年中行事を取り入れた道徳の授業
Ⅲ．モラルジレンマ資料とディベート的な話し合い活動を取り入れた道徳の授業
Ⅳ．福祉に関係する体験活動を取り入れた道徳の授業
Ⅴ．自分の将来像をイメージさせる道徳の授業
Ⅵ．終わりに

Ⅰ．はじめに

私が小学生の時に受けた道徳の授業はつまらないものであった。資料を読みながら次々に先生が主人公の気持ちを聞いていく。国語の授業とどこが違うのか区別が付かなかった。

授業の最後には先生が大事な価値観について話をするので自分で考える必要はなかった。また，資料を一読してしまえば，今日は何について話し合うのか見当がついてしまった。

気持ちを聞うていく道徳授業のつまらなさ。最後には先生の説話が必ず入る道徳授業の形のいやらしさ。読むに足らない資料。

私が教員になってから参観させていただいた道徳の授業もそうかわりはなかった。道徳の授業はこのようにやるものだという雛形ができあがっている感じがした。

それほど長く受け継がれているにもかかわらず，それを受けている子供たちの表情はさえなかった。

私自身教員になってからこのような道徳の授業をしたことがある。しかし，自分がつまらないと感じているものだから当然，子供たちもつまらない。道徳をする毎週の時間はほかの教科の時間に振り返られていった。

「道徳は毎日生活指導の中でしているのだからしなくてもいいのよ。」という先生が少なからずいた。このようなつまらない道徳授業が浸透したために道徳の授業を避ける教師増えたのかもしれない。また週１時間という扱いは他の教科と比べ極端に少ないためにが道徳の授業を軽視する方向を作ったのかもしれない。

今「心の教育」ということばが飛び交っている。心の教育＝道徳教育とすぐに考えられがちである。道徳教育が心の教育をすべて担うには荷が重すぎる。当然学校教育すべての中で心をはぐくむ教育がなされるべきである。

すべての学校での活動を通して心をはぐくむのだとしたら当然道徳の授業でも心をはぐくむことになるのだろう。特に道徳は内容教科ではなく「人間の生き方，考え方」をあつかった領域である。心の教育を担うには重要な取り組みの１つになるのかもしれない。

そのためにも子供たちの目が輝く道徳の授業を作り出していかなくてはならない。またその授業によって子供たちの「生き方，考え方」によい効果をもたらすことを目指さなくてはならない。

今までの道徳授業の雛形をうち破り新しい道徳の授業を作り出す。子供たちが進んで取り組み互いに高めていく。このような授業を目指し実践に取り組んだ。

今回道徳の授業改革をするのあたり板橋区立第４小学校の不破先生にディベート的な活動を取り入れた道徳の授業について指導をしていただいた。

また『「社会的規範」を教える道徳教育の提案』向山洋一著には強く影響を受け実践の中で氏の考え方を取り入れさせていただいた。

Ⅱ．年中行事を取り入れた道徳の授業

1．新しい取り組みに向けて

近頃の子供たちは大変忙しい。1週間のスケジュールはいっぱいであり，1日の時間さえ分単位で生活している。

以前クラスの子供たちに作文を紹介した。学校から帰ってきたが何もすることがなく布団に入ったら寝てしまった，という内容のものである。作文の内容がおもしろかったので読んで聞かせたのだが，子供たちの反応は「うらやましい・・・。」であった。

学校から帰ってきても自分の時間がない。ぼーっとする時間もないのだ。

私たちが子供の頃はもっと時間のスパンが長かったような気がする。1年間はとても長く感じられた。夏休み，冬休みも長くて，早く学校が始まらないかと感じた。

1年間の中には様々な行事がある。それらの行事の1つ1つには日本人が長い年月の間に作り上げてきた生きるための知恵や考え方が詰まっている。

それが今日のように大人も子供も忙しく生活する中で，忘れられてきているようだ。

明星大学の高橋史朗教授は「伝統的な家庭内行事を見直せ」の論の中で次の様に述べている。「中央審議会の『幼児期からの心のあり方について』の答申も指摘しているように，日本人の宗教観や倫理観は，日常生活と比較結びついており，我が国の伝統的な家庭内行事は，たとえば初詣や節分で無病息災を祈ったり，家族一緒に墓参りをして先祖と自分（命）がつながっていることを心で深く実感することなどを通して，人間の力を越えたものに対する畏敬の年を深めるなど，宗教的な情操をはぐくむ重要な契機となってきたといえる。生命に対する畏敬の念は，学校の道徳の時間に頭に概念として教え込むことによっては決してはぐくまれるものではない。それは伝統的な家庭内行事を黙々と行事続ける親の後ろ姿をみて育ち，自らも行事続ける中で自然にはぐくまれるものである。」現代教育科学1998年10月号

(1)　年中行事で子供たちに学ばせたいこと

氏は家庭内での年中行事の大切さを説いている。私は道徳で年中行事を取り上げ，その生き方考え方に触れ，学ぶ事を考えた。このような取り組みを学校で行うことで家庭でも年中行事を見直す機会になるのではないかと考えたからだ。

平成9年度に3年生を担任しているときに「『いただきます』という言葉」，「お盆」，「お正月」を題材に授業を実践した。

2、学習の実際とその考察

実践1，お盆の授業　平成9年　9月実施　実施学年　3年生

(1)　学習の実際

授業の目標

お盆という行事を理解することを通して先祖から自分につながる命について考えることができる

（●教師の発問　　・児童の反応　　○教師の指示）

●夏休みのお盆休みにみんな何をしていた。

・海外旅行　・キャンプ　・海水浴　　・田舎に帰る

39名の中で23名が旅行であった。それぞれのお盆休みの過ごした様子を聞いた後で次のように発問した。

●お盆は何をする日なの

・死んだ人が来る日　　・死んだ人を供養する日　・お墓になくなった人を迎えに行く日

一通りの意見が出た後で祖父母の家でお盆を過ごした児童の話を聞く

「ぼくの田舎では迎え火をした。」迎え火とは先祖の霊をお迎えするために明かりであること。また先祖の霊を送り出す送り火もあることを説明した。

ほかに意見がなかったのでキュウリでできた馬となすでできた牛を提示し，「このような物見たことない」と聞いた。

千葉の田舎に帰っていた児童が「見た。」と言ってその意味も説明してくれた。

「先祖の霊が早く帰ってくるように家に向かってキュウリの馬をおくの。帰りはゆっくり帰るように外に向かってなすの牛をおくの。」田舎にきていたお坊さんから話を伺ったらしい。

このほかにも「盆踊り」「お供え膳」などがあることを説明した後で次のように発問した。

●時々お墓参りに行けばわざわざせっかくのお休みにお盆をしなくてもいいのではないか。賛成，反対のどちらかを選んでその理由も書きなさい。

賛成０人　　反対38人

選んだ理由を聞くと次のように発表した。

・迎えてあげないとかわいそう。　・家での元気なところを見せてあげたい

・家族みんなで迎えてあげたい。

最後に次のように発問した。

●もし自分が先祖の霊になって家に帰ってきたとしたら家族に何て言うか。

・いつも見守っているよ。　・元気か。どんな暮らしをしている。

(2) 学習の考察

なぜ賛成，反対２つに意見が分かれなかったのだろうか

ほとんどの子供たちがお盆の意味をを知らなかったことが大きな理由として考えられる。「ただの休みだと思っていたのに，お盆にこんな大切な意味があるとは知らなかった。」と子供たちは感じたのだ。

お盆の様子を聞いた後にすぐ「お盆休みは田舎に帰るより旅行に行った方がいい。賛成か反対か」と聞けば意見が分かれたのかもしれない。

お盆についていろいろと説明したあとに再度同じ発問「賛成か，反対か」と聞けば子供たちの意見の変容が見られたのかもしれない。

道徳観の対立を生む授業と言うよりお盆について知る道徳の授業になってしまった。

３．新しい取り組みを振り替えって

(1) 授業の流れについて

お盆の授業の後に「お正月」を題材に道徳の授業をした。この授業ではお盆の授業の反省を生かして次のような授業の流れにした。

○お年玉は子供が自由に使ってよい。賛成か反対か

↓

○お年玉を含めてお正月の中で行われる様々な祭事を理解する。

↓

○お年玉は子供が自由に使ってよい。賛成か反対か再度考える。

(2) 子供たちの評価

４年生の終わりに次のようなアンケートをした。児童38人

「３年生の時にお盆やお正月の授業を授業をしました。このような行事を道徳の授業で受けた感想を次の中から当てはまるものすべてを選んでください。」

・おもしろかった	24人	・つまらなかった	２人
・行事の意味がよくわかった	35人	その他・怖かった	５人

アンケートからもわかるように「おもしろい」より「行事の意味がよくわかった」の方が人数が多かった。２回とも話し合いはうまくいかなかったが行事の意味はよくわかったということであろう。また，怖いという児童が５人いた。これはお盆の授業で感じたことだ。先祖の霊ということばが怖

かったようだ。このことを考えると実施した3年生は少し早かったのかもしれない。

(3)　年中行事を道徳の授業に取り入れるために

年中行事を取り入れた道徳の授業の実践は3回である。年中行事の意味を理解することと，その年中行事との子供との接点にある問題を両立させることはかなり難しく感じられた。

お盆　　先祖を迎えるための休み　　←→　　自分たちが楽しむための休み

正月　　年神様を迎え1年の健康を祈る　←→　　年神様からいただいたお年玉を自由に使う

そのためお盆と，お正月の授業ではⅢで紹介するディベート的な話しあいを授業の中に取り入れた。

実施する時期を考え子供たちの問題意識をうまく取り入れられれば年中行事を取り入れて道徳の授業を開発することができるのではないかと考える。

Ⅲ．モラルジレンマ資料とディベート的な話し合いを取り入れた道徳の授業

1．新しい取り組みに向けて

(1)　「モラルジレンマ資料」を用いる理由

コールバーグの認知発達論を受け兵庫教育大学，荒木紀幸教授は次のようなことを提唱している。

「道徳的な葛藤を集団での討議によって話し合う中で，児童一人一人の道徳的な判断力を育成し，道徳性をより高い発達段階に高める」

道徳的な葛藤を扱った資料がモラルジレンマの資料である。たとえば自分の要求とあなたの要求，自分の要求と第三者の要求。日常生活の中ではこのようなモラルジレンマがたくさんある。

モラルジレンマを取り入れることで資料を読みながら登場人物の気持ちを問うていく道徳授業から児童が本当に自分の問題として考え取り組める道徳の授業になるのではないかと考えた。

なお実践では「資料を生かしたジレンマ授業の方法」荒木紀幸行編　明治図書に掲載されている資料を一部修正したものや自作した資料を用いた。

(2)　「ディベート的な話し合い」でねらうこと

ディベート的な話し合いについては板橋区立第二小学校教諭　不破淳一先生が著書『「道徳」授業に取り入れたいディベートの論題』の中で提唱されている。

ディベートは本来自分の意見に関係なく反対賛成のどちらかになり論を立て話し合う。両者が立論，反論をして再最終的にどちらの論の方が説得力があったのかを第3者が判定する。

しかし道徳の授業の中で厳密にディベートを取り入れることよりかは，その形式を取り入れて比較的緩やかな形で行った方が効果が上がるのではないかという氏の考えで「ディベート的」と定義されている。

「自分だったら賛成か，反対か」どちらかを選ぶという活動をとおして子供たちは自分の問題としてとらえ考えるようになるのではないか。

また話しあいを通じて友達の意見を聞き，考えることで自分の価値観を再度見つめ直し修正していく力が付くのではないかと考えた。

生活の中で実際に起こりうるモラルジレンマについて仮想体験する。その中で自己決定をし，話しあいの中では友達の考え方に触れ再度自分の考え方を振り返る。このような思考活動をとおして子供たちに道徳的な判断力が身に付くのではないかと考えた。

(3) 授業の流れについて

ディベート的な話しあいの授業では次のような学習の流れを考えて取り組んだ。

○モラルジレンマの資料を配付，範読する。

↓

○児童は賛成か反対かのどちらかを選び，その理由をノートに記入する。

↓

○賛成側と反対側に分かれるように席を移動し対面型の座席にする。

↓

○人数の少ないグループから意見を発表する。Aグループ

（意見を聞いているグループは質問や反対の意見を言うためのメモをする。）

○もう一つのグループが意見を発表する。　Bグループ

↓

○AからBへ質問や反論をする。

↓

○BからAへ質問や反論をする。

↓

○最終的に賛成か反対かをもう1度考えて選ぶ

↓

○授業で話し合った感想を記す

2．学習の実際とその考察

実践1　主題「早くしなければ」(出典『資料を生かしたジレンマ授業の方法』明治図書)

内容　友情，信頼・公徳心，規則の尊重

主題設定の理由

本学級は3年生である。友人関係も広がり大勢で遊ぶ機会が増えてきている。また，本校は地域を持たない学校のため子供たちが一緒になって遊ぶのは学校にいる時間が多い。

そのため短い休み時間にエネルギッシュに遊ぶ姿が見られる。

それぞれ友達のことを親友と思っているところがあるが，過ごしている時間は少ないため，本当にお互いのことを理解しているとはいえない。

本当の友達ならどのように接していくことがいいのか主題を通して考えさせたいと考えた。

早くしなければ

「ごちそうさまでした。」

給食の終わりのあいさつです。

3年5組のみんなは，いっせいに食器を片づけ，つくえを後ろに下げ，急いで運動場に出ています。今日は，校内ドッジボール大会の日です。3年生の1組と，5組の決勝戦です。

5組でいちばんドッジボールのとくいなみつるは，みんなに

「今日は，がんばって勝とうな。」

と声をかけています。

「うん。みんなで協力して勝とうな。」

とみんなも口々にいって，やる気十分です。そして，いっせいに運動場に出ていきました。

みつるとさとしは家も近所で，宿題をいっしょにしたり遊んだりします。さとしに，上手なボールの受け方や投げ方を教えてくれたのもみつるです。でも，みつるは自分の当番の仕事をよく忘れて，友達に注意してもらってあわてて仕事をするといういけないところもあります。

さとしはドッジボールが大好きですが，足をねんざしているのでできません。

（けっしょうせんに出られないのは残念だなあ。）

と思いながら，図書室でかりていた本を返してから，ドッジボールのおうえんに行こうと思いました。

さとしが図書室から教室に帰ってくると，まだ食かんが残っていました。（今日の食かん係りはだれかな。）と当番表を見てみると，みつるです。

これまで給食の後片づけが全校的に悪いということで，代表委員会で何度も話し合われました。5組もずいぶん悪いので，どうしたらいいか学級会で話し合いました。そして，「4年5組では，給食のあと，持ってきた人が必ず片づける。もし忘れていたら，教えてあげる。」ということが，決められました。

そこでさとしは，ドッジボールをしているみつるに，食かんを返さなくてはならないと教えに校庭に出ました。

コートでは，さかんに「1組がんばれ」「5組がんばれ」とせいえんが送られています。内野を見ると，5組5人，1組5人とせっせんです。ちょうどみつるが思いっきり投げたボールが，1組の人に当たりました。5人対4人です。まわりのせいえんが，ますます大きくなりました。

そのとき，校内放送で

「3年5組は，まだ食かんが返されていません。すぐに給食室のほうへ持ってきてください。」とれんらくがありました。これを聞いたさとしは，校しゃの時計を見ました。すると，給食の片づけを終わらなければならない時間まで，あと5分しかありません。しかし，ドッジボールの試合をしている人や，おうえんをしている人には，放送は聞こえていないようです。

さとしは，「みつる君，食かんを片づけていないよ。」と言う方がいいのか，それともみつるのかわりに食かんを持って行く方がいいのか，まよってしまいました。

本時の目標

クラスの約束が大切なのか，それとも友達を助けてあげる友情が大切なのかをさとしの行動から考えることができる。

(1)　学習の実際

資料を範読

●『みつるは試合に出ているからでていないさとしが片づけてあげればよい。』に賛成の人は○，反対の人は×をつけて，その理由をノートに書きなさい。

反対派の意見　　12人

・自分の仕事の責任は果たさなくてはいけない。
・自分の役目はしなくてはいけない。
・みつるが抜けても同点なのだからするべきだ。
・当番をしないのは悪い。
・決まりを守らないのは悪いことだ。

賛成派の意見　　24人

・さとしが代理にすればいい。
・さとしの当番の時にみつるがすればいい。
・ボランティアでしてあげたらいい。
・友情があるんだったらしてあげていい。
・試合に負けたら困るからしてあげた方がいい。
・試合に負けたらさとしが攻められる。

反対派から賛成派への意見

・本当に係りを交代してくれるのか

賛成派から反対派への意見

・「同点」という意見があったけどみつるが抜けたら負けてしまうかもしれないのではないか。
・仕事をさぼると言うことでなくて交代すればいいんじゃないか。

○最後にもう一度賛成か反対かを選びなさい。

賛成・・・24人→22人　　反対・・・12人→12人

○授業の感想を書きなさい。

・さとし君の時にみつるがするという意見になるほどと思った。自分の考えで変わったことは友情から試合のことになったこと。私だったら片づけてあげる。考えは変わったけど×は変わらない。
・×派の意見を聞いてみつる君はすごく負けるのがいやなのではないかと思いました。けれど○の意見もいいと思います。

(2)　学習の考察

友情，公徳心という内容の資料であったが子供たちの思考は「どうすれば試合に勝てるのか」という点（協力）に重きが置かれていってしまった。

もっとストレートに「手伝ってあげることは『友情』といえるか」と聞いた方が主題に迫れたのかもしれない。

しかしこの資料から子供たちが一番重要と感じたことはクラスの勝利である。それに付随する様々な価値観を「選ぶ」というよりも，勝つためにこれらの価値観を「調節しよう」とする意識が子供たちに働いたようだ。

教師が意図した展開にならなかった。またそれぞれ意見を言った後に自分の意見が○から×というように大きく変わる児童もいなかった。

それでも子供たちはこの話の中を自分たちの問題ととらえ様々な価値観を調節しようと考えていったことは評価して良いのではないかと考える。

子供の感想の中にもあったように自分の意見は変わらないが友達の意見に耳を傾けそれぞれの考えの良さが分かる。このような話し合いの中で友達との関係の調節ができるのではないかと感じた。

実践２主題「どうするあきら」自作資料
内容　友情，信頼・公徳心
主題設定の理由
本校では雨の日に室内で遊ぶ遊び道具を持ってきていいことになっている。３年生の後半になり子供たちの遊び道具も広がりを見せている。
自分でお小遣いを使えるようになってきた子供が増えているようでバトル鉛筆やカードなど，雨の日にはいろいろな遊び道具で遊ぶ姿が見られるようになってきた。
それに伴い様々なトラブルも起こるようになった。
「先生，ぼくの持ってきたカードがありません。」このような苦情のほかにカードの交換から起こる苦情も増えてきた。
「先生，○○くんがぼくのカードちょうだいってうるさいんだ。」といった担任に寄せられる苦情のほかにも遊びの中で様々なトラブルが生まれてきた。
「何でぼくにはカードくれないいんだ。」
「ねー，カードちょうだい。」
このような場面を道徳の時間にみんなで考えることで交換のルール，またもらう側あげる側の気持ちを考えることで遊びのルールを振り返りクラスで再度作り直すことができるのではないかと考えた。

どうする　あきら

ある朝学校につくと，けんじのまわりに友だちがたくさん集まっていた。あきらがのぞくとけんじがたくさんのカードをみんなに見せていた。
まわりの友だちは「カードみせて，みせて」とけんじにお願いしていた。
いつもはあまり友だちと遊ばないけんじもみんなが話しかけてくるのでとてもうれしそうだった。
そのうち友だちの一人がけんじに「このカードちょうだい。」といった。
始めはこまった顔をしていたけんじだったが「うん，いいよ。」といってあげてしまった。
そうしたらほかの友だちも「ちょうだい。ちょうだい。」と言ってけんじからカードをもらっていた。
あきらも自分が前からほしかったカードがあったのでけんじに「このカードちょうだい。」とおねがいした。
するとけんじは「はい。」と言ってカードをくれた。すごくほしかったカードだったのであきらはとびあがりたいほどうれしくなった。「けんじくんありがとう。」とあきらが言うとけんじもにっこりしていた。
次の日の朝，こんじがあきらに話しかけてきた。
「あきら君，悪いんだけどきのうあげたカード返してくれないか。」
「え…どうして，きのうくれるって言ったじゃない。」
「やっぱり，あげるのやめにしたんだ。あしたもってきてね。」
そういうとけんじは走っていってしまった。あきらはこまってしまった。

本時の目標
友達にものをあげることから友達との関係とみんなのきまりについて考える事ができる。。

(1)　学習の実際

今までに友達から何かもらったこと，あげたことについて子供たちから意見を聞く。

資料を判読

●あきらはカードをかえずべきである。賛成か反対かどちらかを選んでその理由も書きなさい。

賛成派　　11人

・けんじがかわいそうだ。　2人
・返せばけんじがよろこぶ
・もとはけんじのものだ。　　2人
・カードは自分で集めるものだ。
・「かえして」と言っているんだから
・本当はあげたくなかったんじゃないか。
・泥棒扱いされてしまう。

反対派　　24人

・もらったものは自分のもの。自分のものは好きにできる。　　12人
・あげると言ったじゃないか。
・友情には関係ない。
・２年生の時の先生が「もらったものは返さなくてもいい。」といっていた。
・あげると言ったのに返してはずるい。

賛成派から反対派へ

・「返して」と言っているんだから返してあげたらいい。返さないあきらは意地悪だ。
・間違えてあげたんだからかえしてあげれば。←間違えたんなら最初に返してといえばいい。

反対派から賛成派へ

●最後に賛成か反対かをもう１度選びなさい。

賛成　11人→15人　　反対　24人→23人

●みんなはけんじのことをどう思いますか。一言でノートに書きなさい。

・けんじは友達が少ないからあげたんだ。
・友達との接し方が悪い。
・友達がへる。

(2)　学習の考察

子供たちは実際にカードを上げたりもらったりという経験があったためか大変積極的に話しあいに参加した。

返すべきと考えた賛成派の子供たちは比較的おとなしい子供たちで友達の気持ちの方を優先したようだ。

かえずべきではないと考えた子供たちは「約束は約束。自分の言ったことを変えるけんじはずるい。」と考えていた。また２年生の時の担任の先生に言われた「もらったものは返さなくてもいい。」という言葉がすでに自分の中のルールとしてしっかりできあがっている児童もいた。

子供たちの生活に身近ということもあってよく考えていた。

最後にけんじのことをどう思うかという発問をした。やはりけんじのとった行動に対してマイナスに考える意見が多く出た。

この後あきらとけんじの友達関係を築いていくのであれば
「けんじにカードを返すとしたら，どんな言葉をかけるか。」という発問をして返すことに反対していた子供たちにも友達との関係を調整する事を考えさせるのも良かったのではないかと感じた。

3．新しい取り組みを振り返って

(1) 話しあいを成立させるための教師の働きかけ

3，4年生の間に全部で14回のディベート的な話し合いうを取り入れた道徳の授業を行った。授業での話し合いをうまく機能させるように途中で2回の指導を子供たちにした。

指導1メモを取ること

ディベート的な話し合いの中で，お互い意見を言った後に反対や質問の意見を言う。このときに自分と反対の側の意見をよく聞いていないと反対意見が言えない。言いっぱなしになり話し合いが深まらない。

そこで反対側の意見を聞くとき「あれ，おかしいぞ」と思ったらその人の名前と意見を簡単にメモするように指導した。

メモすることで反対や質問の意見の時間に活発に意見が出るようになった。

指導2　感想の書き方

感想を書くときの視点を子供たちに3つ与えた。

- 自分だったらどうするかについて考えたこと
- 友達の考えでなるほどと思ったこと
- 自分の考えの変わったこと

・「自分だったら，どうするのかについて考えたこと」

ディベート的な話し合いの中で活発に発言する児童もいればそうでない児童もいる。発言の少ない児童がいい意見を持っていることも多い。

感想に「自分だったらどうするか」考えをしっかり書かせることで，このような埋もれたいい意見を発掘できた。

・「友達の考えでなるほどと思ったこと」

ディベート的な話し合いの中ではお互い意見を言い合うので，相手に共感できる部分があっても，それが相手に伝わることはない。

感想に「友達の考えでなるほどと思ったこと」で相手の意見の良いところをお互いに伝えあうことができる。こうすることで意見の言い合いに終わらず，互いによい部分をたたえ合って話し合いを終わらせることができる。

・「自分の考えの変わったこと」

ディベート的な話し合いのはじめに，賛成反対のどちらかを選んだら，その人数を確認する。ディベート的な話し合いが終了した時点で最終的に賛成か，反対か再度人数を確認する。

このときに数字上はあまり差が見られない。大きく賛成から反対に，また反対から賛成に意見が変わる児童はそう多くはない。

しかしはじめから最後まで賛成の児童の中にも自分の意見が少しずつ変わる者もいる。そのような児童を把握することで子供たちの数字には表れない変容を見ることができた。また授業の評価もできるようになった。

(2) 子供たちの評価

ディベート的な話し合いについてのアンケートをおこなった。

平成11年3月実施（4年生の終わり）

1．このような話し合いの多い道徳の授業をうけておもしろかったですかつまらなかったでうか。

おもしろかった・・・38人　　つまらなかった・・・・0人

2．道徳の授業の中でお友達の考えに，もっともだと感じることはありましたか。

よくあった・・・・・12人　　たまにあった・・・18人

あまりなかった・・・5人　　全くなかった・・・0人

3．道徳の授業の中で自分の考えが変わることはありましたか。

よくあった・・・・・3人　　たまにあった・・・15人

あまりなかった・・・11人　　全くなかった・・・4人

4．道徳の授業の中でお友達のいつもと違う面を発見することはありましたか。

よくあった・・・・・4人　　たまにあった・・・16人

あまりなかった・・・15人　　全くなかった・・・1人

よく道徳の授業が始まる前に「先生，またあの話し合いするの。」と子供から聞かれた。「意見がぐさぐさ胸に刺さるからいやだなー。」という児童もいたがほとんどの児童はこの話し合いが好きであった。このような話し合いをしないと「またやってくれ。」とアンコールの声があがった。なぜこれほどの子供たちに受け入れられたのか先ほどのアンケートの中に「道徳の授業についての感想を自由に書いてください。」という項目がある。

その中に答えとなる言葉がいくつか見つかった。

・話し合いはドキドキするから楽しい。
・間違え，正解がないから意見が言える。だからよかった。
・反対や賛成の判断ができるようになって意見も考えられるようになった。
・いろいろな人の考えが分かっておもしろかった。

(3)　子供たちの変容

資料を読むとどちらにしていいか考えてしまう。
でも賛成か反対どちらかを選ばなくてはいけない。
自分の意見を言うと相手の友達から反論される。
それにもまた答えなくてはいけない。

話し合いを聞いているとお友達の違った面を発見する。
話し合いが進むにつれて自分の意見も揺れ出す。
最後は自分で決めなくてはいけない。

このような思考の活動を子供たちなりに楽しんでいたのであろう。教科の学習とは違い道徳にははっきりとした既習事項はない。あるとすれば今までにそれぞれが生活の中で学んできたルールであろう。

それをぶつけ合うことでお互いに理解し合えることも多かったように思う。

平成9年度の第60回教育実際指導研究会では全国の先生がたに参観していただき意見をいただいた。その中で「このような話し合いを続けていると子供たちの関係が良くなくなるのではないか。」と質問された先生がいた。

1時間の授業だけ見るとそのように感じるのかもしれないが実際はこの様なディベート的な話し合いを続けることで逆に子供たちの仲が良くなっていった。

もちろん道徳の授業だけが理由ではないだろうが，この取り組を続けることで「いつもは知らないあいつ」を再発見し，互いの理解が深まっていったようだ。

「喧嘩するほど仲がいい。」と言うがディベート的な話し合いを通して『仮想の喧嘩』をしてお互い相手を理解し仲良くなっていったようだ。

(4)　新しい実践の評価

ディベート的活動を通してクラスの輪を作ることができたが，子供たち一人一人の道徳的な判断力は付いたのだろうか。

このように考えてみると疑問が残る。話し合いを子供たちに任せているために最後に教師から価値を押しつけるようなことはしていなかった。そのため授業はオープンエンドで終わっていた。

話しあいを通して新しい価値を見いだし道徳的な判断力を身につけた児童はそう多くはないのでは

ないか。何度も授業をする中で感じた。

子供たちの価値観がひっくり返るような，また新しい価値観を形成するようなショッキングで力のある学習材を開発したい。このような反省がまた次なる実践の研究動機になった。

Ⅳ．福祉に関係する体験活動を取り入れた道徳の授業

1．新しい取り組みに向けて

森　隆夫お茶の水女子大学名誉教授は第59回教育実際指導大会（平成８年度）の講演の中で「人間ショックがなければ変わらない。」とお話をされた。私もショックを受けた経験がある。

７年前，友人と二人でアメリカ，カリフォルニアに出かけた。どこの駐車場でもお店に一番近い場所の５台分くらいは車椅子のマークがあるのにびっくりした。

町には車椅子を押している人，ウオーカーを使って町の中をゆっくり歩く人も多く見かけた。障害のある人を受け入れる町になっているんだなと感心した。１番ショックだったのは元日のローズボールスタジアム。アメリカンフットボールの試合会場に車椅子にお母さんを乗せて押しているファミリーを見かけたことだ。日本ではとても考えられない。私は何度も東京ドームに行ったことがあるが車椅子を押している人は見たことがない。

アメリカに比べ日本はまだ障害のある人にとっては後進国であると感じた。

最近はバリアフリーという言葉とともにいろいろなところで身体に障害がある方を助ける設備が十分ではないが整いつつある。しかしそれを支える人々の心のバリアはまだ，フリーになっていないのではないのだろうか。

体験活動と力のある学習材

子供たちが大人になる頃には町の設備も整って行くであろう。その時に障害のある人たちを支える大人になれるように道徳の時間や総合の時間を使って学習していくことはとても大切なことだと考えた。

単なる言葉だけの知識ではなく体験活動をとおして実際に生きて働く知識を子供たちに身につけさせたい。

また学習の中では体の不自由な方の体験をつづった文章も子供たちに読んで聞かせたい。本単元では星野富弘さんの文章や朝日作文コンクールの作品を使った。

これらは読み聞かせるだけで心を揺り動かすすばらしい作品である。このような作品を読んで聞かせることで子供たちの価値観，考え方を変容させることができるのではないかと考えた。

これから実践を紹介するに当たり以下の実践を参考にさせていただいた。

「平成７年度　ジュニアボランティア教育実践報告集
深川の会（東京都教育研究奨励費受給研究グループ）江東区ボランティア教育研究会編」
「ジュニアボランティア教育テキスト集」向山洋一編　　明治図書
「生き方の原理原則を教える道徳教育」向山洋一監修　　明治図書

本実践では道徳と総合を取り入れた８時間を１つのパッケイジと考えて取り組んだ。心を扱う道徳と福祉の視点で体験的に取り組む総合活動をセットにすることで学習効果が高まることをねらった。

実際の指導計画

・シルバーシートから障害を持つ人にはどのような方がいるのかを理解する。		道徳	１時間
・車椅子体験とその介護についての理解。	実践１	総合	２時間
・ブラインドウオークの体験と目の不自由な方の介護について理解。	実践２	総合	１時間
・点字の歴史とその使い方の理解		総合	１時間
・耳の不自由な方と手話の理解		総合	１時間
・お年寄りの方の体を拭く介護についての理解		総合	１時間
・「かわいそう」という言葉について考える	実践３	道徳	１時間

2．学習の実際とその考察

実践１車椅子体験とその介護の理解　総合

本実践をするに当たって豊島区福祉事務所と文京区福祉事務所から計10台の車椅子をお借りした。また先に紹介した「ジュニアボランティア教育テキスト集」を参考にさせていただいた。

本時の目標

車椅子の介護の仕方を体験，学習する中で障害者の気持ちを考えること，介護する側の心の持ち方を理解することができる。

(1)　学習の実際

○車椅子のマークを黒板に提示

●このマークをどんなところで見たことがありますか。

・バス　・電車　・トイレ　・電話　・エレベーター　・駐車場　・駅の階発

●発問１　みんなの意見の中でぼくも，私もそこで見たことがあるという人手を挙げてください。

●発問２　次に，マークではなくて実際にそこで車椅子に乗っている人を見たことがある人は手を挙げてください。

	発問１	発問２
バス	38人	10人
電車	36人	22人
トイレ	30人	14人
電話	28人	７人
エレベーター	26人	18人
駐車場	16人	４人
駅の階段	21人	19人

●車椅子を使っている方は全国で323万人いらっしゃいます。35人に１人の割合です。それでも今君たちが言った様にマークはたくさんあるのに実際に車椅子を使っている方を見る機会は多くありません。どうして車椅子の方が外に出づらいのでしょう。自分の考えをノートに書きましょう。

・疲れる。（押してくれる人がいない。）

・町に段差が多い。

・助けてくれない。じゃま扱いされる。

・差別される。

・階段，坂が多い。

・危ないし，狭い道は通しづらい。

・乗り物，トイレが少ない。

○助けてくれる人がいないという意見がありましたが今日はみんなで実際に車椅子を使ってその介護の仕方を学習しようと思いますが，どうですか。

・やってみたい。

場所を体育館に移し車椅子１台を使って全員に以下の介護の仕方を説明した。

・車椅子の折り畳み方。

・段差での介護の仕方

・坂道の下り方

・車椅子に乗る方への声のかけ方

４人で１台の車椅子を使うことにした。学校から茗荷谷の駅までの約600メートルを途中で交代して２人が乗る人と介護する人をする。帰り道はまだしていない２人が乗る人と介護する人を交互に行う。これで４人全員が乗る人と介護する人を経験する。

車椅子体験と介護を終えたら車椅子の乗った感想と，車椅子を介護した感想を２つをノートに記すよ

うに指示した。

車いすの人が外に出づらい理由　原田真由
。ふ通のへとちが、て体のどこかがけがをしていて
不べんだから。
。たんさか坂が大変だから。(つかれる)
車いすをおした感想
。道がなめのところが大変だった。
。思たよりかのいる事だった
車いすに乗った感想
。車いすに乗っている人は、とても不べんな事が
よく分かった。
。自分の力では、動けないけど、
人の力をかりればみんな協力できる。
。まわりの人にジロジロ見られる。
。車いすに乗っている人が外に出づらい
気持ちがなんとなく分かった。

(2) 学習の考察

5，6年生以上での車椅子の実践は多いのだが4年生での実践はまだ見たことがなかった。自分のクラスで実際に試行してみて，やはり4年生には少し早いのではないかと感じた。

理由は2つある。

まず1つは車椅子に乗ると遊びたくなってしまうこと。

体の不自由な人の気持ちを考える意味で車椅子の乗っているのだが，子供たちは介護されるより初めて乗った車椅子を操縦したくて仕方がない。4年生というまだ幼い子供たちには車椅子を障害のある人のための道具ととらえることは難しかったのかもしれない。

2つ目は体力がないために安全に車椅子を操作することができないこと。

実際の介護なさった事のある方はおわかりだろうが車椅子の介護は「こつ」と「腕力」がいる。なれない者，腕力のない者には段差での車椅子の上げ下げまた斜面での操作は難しい。

実際に取り組んでみて4年生にはやはり操作は難しかった。特に斜面では車椅子が曲がって進んでしまい付き添っているメンバーに助けられる場面が何度もあった。

実施時期としては早いと感じたが成果もあった。

まず車椅子に乗って障害者の模擬体験をした児童は今までは気がつかなかった様々なことに気がついた。

実際に車椅子に乗ってみると視線が低く見える世界がいつもとは違うことに驚く。また乗っていると進んでいる前に何も遮る物がないので怖く感じる。いつもは気にならない自転車や植木鉢などが車

椅子にぶつかるのでじゃまだと感じる。

また，実際に介護した児童は思っていたほどうまくいかないことに気づく。

段差などで乗っている人に声をかけることを操作に夢中になって忘れてしまう。段差がうまく越えられない。自分が思った方向と違う方向に車椅子が進んでいってしまう。

このように実際に体験することで障害者の気持ち，介護する側の気持ちを考えられたことは貴重であった。

実践２　目の不自由な方の介護についての理解　総合

本学級の児童は３年生の時に国語の「盲導犬と暮らす」の学習の中で実際に視覚障害者の方と盲導犬を学校に招きお話を聞いている。

また学校の近くに盲学校があるため学校の行き帰りに白杖を持った方を見かける機会も多い。そのため視覚障害者の方には関心も高かった。

本時の目標

視覚障害者の介護の仕方について体験，学習する中で視覚障害者の気持ちを考えること，介護する側の心の持ち方を理解することができる。

(1)　学習の実際

●目の不自由な方を町で見かけた人がある人

大勢の児童が挙手

●どうして目が不自由だと分かりましたか。

・盲導犬をつれていた。

・白い杖を持っていた。

・サングラスをかけていた。

●目の不自由な人が町にでて困ることはなんだろう。

・人にぶつかってしまう。

・信号が分からない。(「だから音楽のなる信号があるじゃん」とほかの児童が助言)

・階段の上り下りが大変

・盲導犬をつれていると食事をする店などで断られることがある。

●それでは目の不自由方が町でこまっていたとします。あなた方はどうしますか。

・「何かできることはありますか。」と聞く

・歩くのを手伝ってあげる。

「歩くときにどの様に手伝ってあげれば良いのでしょうか。」

・手を握って引っ張ってあげる。

・後ろから背中を押してあげる。

・杖を引っ張ってあげる。

●それでは今でた方法を隣の人とやってみたい人

いくつかのグループが実際に黒板の前で実演してみる。

○なかなかうまくいきませんね。

誘導された人どうでしたか。『怖かった。』

実際に誘導する時は白杖の反対側にたちます。そして自分の肘を目の不自由な方に持っていただきます。

障害物を事前に教えてあげたり，まわりの景色を教えてあげたりします。間違っても白杖をもってはいけません。白杖は目の不自由な人にとって目のかわりをする大事な物なのです。

それでは実際に隣の人とペアーとなり介護をしてみましょ

う。

片方の児童にははちまきで目隠しをしてもらう。3階の教室から階段を降りて下の階まで介護する。下の階まで無事ついたら交代する。今度は介護されていた児童が介護する側になって教室に戻ってくる。

(2) 学習の考察

目隠しをして階段を歩くという経験は初めてだったのでどの児童もかなり怖かったようだ。視覚障害者は歩くことが怖いという先入観を与えてしまったかもしれない。

怖かった分介護してくれている相手の優しい言葉や助けがとても役に立ったようだ。

介護する側の児童は相手が怖がっているため自分の言う言葉がとても大切だと感じたようだ。

また腕をとってもらい相手のことを気にしながら半歩前を歩くことはかなり難しいことだったようだ。

実践3「かわいそう」という言葉を考える　道徳

これまでに障害のある方に対しての様々な介護を学習してきた。本時の学習はそのまとめとして考えた。

いろいろな介護を学習したが，相手の方の親身になって考える心がなければ本当の介護とはならない。

今学習している児童が大人に成長していく中で自然に介護できる様になるにはやはり心のバリアを解かなくてはいけないだろう。

それぞれの介護を学習した時間では介護のマナーについては学習しているが心の持ち方は大きくは扱ってきていない。

本時の学習をすることで，今まで学習したことをもう1度振り返り障害のある方と共に生きていく事について考えさせたい。

本時の目標

障害のある方にと共に生きていくとにはどのような心の持ち方が大切なのかを考えることができる。

(1) 授業の実際

児童を全員黒板の前に座らせる。

黒板に障害のある方（肢体不自由で車椅子に乗る児童，車椅子に乗る老人の方，視覚障害者の方）の写真を提示

●町で体の不自由な人を見たときみんなはどのようなことを考えますか。ノートに一言で書きなさい。

○全員，発表してください。

・かわいそう　　・大変そう　　・何か手伝ってあげたい　・みんな健康ならいいのに。

「以前みんなに星野富弘さんの事をお話ししました。星野さんも体が丈夫な頃はみんなと同じ様なことを考えていたそうです。」

星野さんの文章を提示

わたしがげんきだったころ，からだのふじゆうなひとをみれば，□とか□とさえ思ったことが随分ありました。

●右の文の四角の中にはどんな言葉が入ると思いますか。

・かわいそう

○1つは正解です。もう1つは分からないようですので教えます。『きもちわるい』です。

ショッキングな言葉だったようで子供たちの動きが止まる

●体の不自由な人は「かわいそう」と言われることをどう思うでしょう。ノートに書いたら自分の席に戻りなさい。

・あまりうれしくない。自分もみんなと一緒に生活しているのだから。
・自分だけ差別されているようでいやだ。（特別ではない）
・健康な人に気持ちを知ってもらいたい
・特別扱いはいや
・元気なことを自慢されているようだ。
・悲しい　　・恥ずかしい

○星野さんの文章の続きを読む。　　鈴の鳴る道　星野富弘著　より引用

> 私が元気だった頃，体の不自由な人を見れば，かわいそうだとか，気味が悪いとさえ思ったことが随分ありました。
>
> しかし，自分が車椅子に乗るようになって，初めて分かったことなのですが，体の不自由な自分を，不幸だともいやだとも思わないのです。
>
> けがをして１，２年は，体のことで悩んだり，苦しんだりしました。でも，受けた傷は，いつまでも，開きっぱなしではなかったのです。傷をなおすために，そこには新しい力が自然とあたえられ，傷あとは残りますが，そこには前よりつよいものがもりあがって，おおってくれます。
>
> 体には傷をうけ，たしかに不自由ですが，心はいつまでも不自由ではないのです。
>
> 不自由と不幸はむすびつきやすい性質を持っていますが，まったく，べつのものだったのです。
>
> 不自由な人を見て，すぐに不幸と決めつけてしまったのは，わたしの心のまずしさでした。

●体の不自由な方が喜ぶ言葉や行動はどんなことでしょう。ノートに自分の考えを書きましょう。

・車椅子を押して手伝ってあげること。
・声をかけること
・みんなと一緒の友達みたいにしてあげること。
・差別をしないこと

障害を持っていて今がんばっている人の作文を読む。

○授業の感想を書いてください。

・体の不自由な人はかわいそうだと思っちゃうけど，いやがることはしたくない。だから何か手伝ってあげたい。
・自分でできることで喜んでもらえることをできるだけ簡単なことから１つ１つやっていきたい。(はじめは声をかけることから)
・体の不自由な人は「かわいそう」と思われることがいやみたいだけど見ていると思ってしまう。みんながんばって生きているから。
・人間みんな健康だったらいいのに。

最後に，障害を持っているが一生懸命生きている小学生の作文を朗読した。

わたしのできること

神吉　麻里（２年）

１年生のうんどう会でわたしは，リレーのせんしゅでした。それが２年生の時は，車いすで見学でした。

きょ年の４月17日にターザンごっこをしてロープから手をはなしてしまい高いところから，おちて大たいこつをこっせつして入いんしてしまいました。１学きは，ほとんど学校へ行きませんでした。

その入いんしている時に同じびょう室に手話で話をしている人と一しょになりました。学校で手話やしん体しょうがいしゃについてべん強したことがありました。さいしょは，お話できなくてかわいそう

だと思いました。でもその家ぞくはとても楽しそうに手話でお話をしたり，みんなに手話を教えてくれました。わたしもお友だちになりました。

そしてわたしは夏休みにたいいんしました。しかし，わたしのほねのせい長は「ふつうの人とはちがう。一つベットよういい。」と先生に言われさい入いんすることになったのです。その時わたしのあたまがゆれて気ぜつしそうになりました。なぜならけんいんのためにまた足のほねにドリルであなを空けて，金ぐを入れるとてもいたいことをするからです。

そして，5か月もたつこと，すわることもできず足をつってねたままの生活が続きました。そしてやっとたいいんできるほどほねがつきそれからリハビリがはじまりました。ずっとうごかさないでいた足は立つことも歩き方もわすれてしまいました。きん肉をやわらかくしたり足にきん肉をつけるリハビリです。先生が体じゅうをのせてわたしのかたくなった足をのばすのです。いたくてつらくてもうがまんはこりごりでなみだがなくなりそうでした。

リハビリ室には，たくさんの人が来ています。その中にはかた足だけの人がいました。その人はプラスティックみたいな足をつけてたいへんそうにあせをいっぱいかいてリハビリをしていました。わたしは「いたい！　でもわたしもがんばる!!」そうさけんでいました。わたしのとくべつなほねは今がんばらないと大人になっても足をひいた歩き方になってしまうそうです。今は家でも1日5回リハビリをしています。

わたしはまだふつうには歩けません。でもぜっ体歩きたいのです。そしてはしりたい。バレーをならったり友だちとまつばづえなしで手をつないで学校やバスにのってプールへ行ったり，てつぼう，おにっごこしそしておかあさんと一しょになわとびをしたり，うんどう会で思いきりはしりたい。これはぜんぶわたしのできることだったのです。

それから今わたしが思っているもう一つのことは手話の人や車いすの人がいたら「こんにちは。わたしに何かできることがありますか。」とあいさつできるようになることなのです。

朝日作文コンクール入選作　人に役立つ心の芽ばえ作文23選　明治図書

(2) 学習の考察

今まで介護について6時間学習してきた。どの学習も「こんにちは，私に何かできることはありますか。」という言葉を扱ってきた。

それでも障害者の写真を見ると，まず「かわいそう」と考える児童が半数を超えた。「何か手伝ってあげたい。」と考える児童は10名足らずであった。

もし今までに介護の授業をしていなければ「手伝ってあげたい」と考える児童はほとんどいなかったのかもしれない。

教師が考えている以上に子供たちの心のバリアは大きかったようだ。

星野さんの文章は強烈であった。特に2つ目の四角「気持ち悪い」という言葉を教師が言ったとき子供たちの動きがぴたりと止まった。この言葉は子供たちの心のどこかにあった言葉だったのであろう。

この後の「障害者は『かわいそう』と言われることをどう思うか。」という発問から子供たちは真剣に考える様になっていった。

「体の不自由な人が喜ぶ言葉や行動はどんなことか」という発問では子供たちが自分たちと同じ仲間として障害のある方を考える意見が出るようになった。

この授業は平成10年度第61回教育実際指導研究会で全国の先生方に見ていただいた。「子供たちが美しい言葉を並べていたが，本当に言葉のようにできるかは分からない。」という意見をいただいた。確かにおっしゃるとおりだが，子供たちは「かわいそう」という言葉から体の不自由な方のことをいつもより真剣にそして深く考えられたと思う。

今までの6回の実践の中では生まれなかった言葉「差別」や「みんなと一緒に」が子供たちからでたのは健常者と体の不自由な人を結びつけて考えることができたからであろう。

体の不自由な方々の声が子供たちの心に訴えたのだと感じた。大人だってそう簡単にはできないこと

を10歳の子供たちがよく考えていた。

3．新しい取り組みを振り返って

(1)　子供たちの評価

学年末に採ったアンケートに次の様な項目がある。

「4年生になってから障害のある人のことを考える道徳の授業をしました。このような授業をしておもしろかったですか。つまらなかったですか。」

・おもしろかった。　37人　　・つまらなかった　1人

また，「道徳の授業についての感想を自由に書いてください。」の項目では次のような意見があった。

・体験ができて良かった。　2人
・障害者の気持ちなどが分かりとても良かった。　4人
・障害者の授業は難しかった。　1人
・障害のある人に役立ってもらえれば道徳の授業も良かったと思う。1人

授業を終えてから半年あまり後に採ったアンケートであるが子供たちはこの「障害者について考える」授業をよく覚えていたようだ。

(2)　「介護」の学習を取り入れたことについて

8時間の福祉を扱った授業を振り返ってみて，確かに4年生では介護の学習をするのには早いのかと感じることもあった。しかし下の学年子供たちの方が障害のある人について感じ，考える純粋な心を持っているのではないかと感じた。

福祉については5年生からというように学年を決めずに各学年で取り組める内容を考えていければいいのではないかと感じた。

(3)　道徳と総合の連携

道徳2時間と総合6時間というパッケイジで単元を構成した。道徳の時間では特に心の部分「介護をするためのマナー」に重点を置く学習を行った。

総合では実際に介護をするための知識，技能の部分を体験しながら学習した。

どちらも欠くことができない大切なことであり，2つを両立して学習したことに意味があったと考えている。

子供たちはこれは道徳，これは総合というように区別していなかった。8時間の学習を終えた後「今まで作ってきたノートに題名を付けてごらん」と子供たちに言ったところ次のような名前を付けていた。

・体の不自由な人の気持ち　・・・17人
・みんなのための学習　・・・2人
・体の不自由な人の気持ちを考える学習・・・5人

障害者について考え，学んだ時間ととらえていたようだ。

(4)　作文を学習材として授業に取り入れたことについて

実践3「かわいそう」という言葉を考える授業では星野富弘さんの文章，朝日作文コンクールの作品を子供たちに読んで聞かせた。

なぜこれらを用いたかというと道徳の時間に教師が話す説話よりも教育力があるのではないかと考えたからだ。

読むだけで子供たちの心を揺さぶる力のある作文。読み始めると子供たちの動きが止まり教室の空気がピント張りつめた。

このような学習材をもっと道徳の授業の中で取り入れるべきではないかと考えた。

朝日作文コンクールの作品は道徳で取り上げた後も朝の会に1編ずつよんで聞かせた。子供たちは

作文を聞くのがとても好きになった。

V．自分の将来像をイメージさせる道徳の授業

1．新しい取り組みに向けて

最近の中学生，高校生の行動には目にあまるものがある。「個人の自由」を主張し，自分勝手でわがままな行動をする者がいる。「自由」の裏には必ず「責任」があることが自覚されていない。また注意されなければ何をしてもいいと感じている若者も多い。

小学生も近い将来中学生，高校生に育っていく予備軍である。

本学級の児童の中には4年生後半になりこのような町にいる若者の行動を注意深く見る様になってきた者がいる。階段で飲食する高校生，空き缶を片づけずに起き去る中学生などを観察し日記に書いてくるようになった。

このような若者の行動，マナーに対する問題意識が生まれてきたのだ。

また，児童の中には自分たちのルールを拡大解釈し勝手に行動する者も現れている。バスの中でマナーが悪く注意されることも増えてきている。注意した方に対して「うるせー。」と暴言を吐き学校に苦情が寄せられることもあった。

自分たちのマナーに対してルーズになってきている。

以上の2点から自分たちが大きく成長していく中で守らなければならないマナーについて道徳の時間に考えてみることにした。

2．学習の実際とその考察

実践1　ジベタリアンについて考える　4年生3月に実施

コンビニの横の階段で飲食をする高校生に対して腹を立てたことを日記に書いてきた児童がいた。「じゃま」と感じたほかに「その後にたくさんのゴミが散らかしっぱなしになっているのが困る。」と書いていた。

こどもたちの中に社会のルールのついて考える児童が見られるようになった。そこで今回地面にぺったりと座る「ジベタリアン」について考えることにした。

尚，この実践は板橋区立第4小学校　不破淳一先生の実践の追試である。

本時の目標

個人の自由と公共のマナーについて考える事ができる

(1)　学習の実際

ジベタリアンの写真を黒板に提示

●この写真を見て思ったこと，考えたこと，不思議に思ったことをノートに書きなさい。

・汚い　　・非常識　　・ゴミを捨てている

・何で歩道に座るの　　・何をしているの

・じゃま　　・怖い

・周りの人に見られて恥ずかしくないの

●『べつに迷惑をかけていないんだから，地面に座っていてもかまわない。』に賛成か反対かどちらかを選び，その理由もノートに書きなさい。

賛成派　　12人

・迷惑はかけていない。困るのは自分。

・自分の勝手

・座っていけないと言う決まりはない。

・じゃまではないし，汚いのは自分
反対派　　22人
・ゴミを捨てているから町が汚くなる。
・目の不自由な人がいたらつまずいてしまう。
・人が多いところではじゃま
賛成派から反対派へ
・ゴミは捨てていないのでは
・汚いと言うけれどその人が自分で洗えばいいんじゃないか。
・迷惑をかけているかどうか分からない。
反対派から賛成派へ
　なし
○実際にジベタリアンの若者にインタビューしたビデオがありますので見てみましょう。
（ニュースステーションで特集された物を見せる）
●最後にもう１度ジベタリアンに賛成か反対か決めなさい。
　賛成　12人→11人　　反対　20人→25人
●将来自分がジベタリアンになると思う人
　なる・・４人　　ならない・・30人
○最後に感想を書きましょう。
・やはり迷惑。　　４人
・歩く人のじゃまになる。　　５人
・自分はこのようになりたくない。　　６人
・汚い。　　４人
・この人たちは自分のことしか考えていない。
・ジベタリアンになるのはいや。でもいいんじゃないの。
・ジベタリアンになりたくない。けどなるかもしれない。
・ぼくは将来なりたくない。でも人がなるのは勝手

(2)　学習の考察

写真，映像があったため子供たちは楽しみながら授業に取り組めたようだ。この題材では「個人の自由」と「社会のマナー」の２つ，どちらを大切にするのかを考えることになる。

子供たちのほとんどが「自分はジベタリアンになりたくない。」と感じているようであった。それとは別の視点になるが「自分はなりたくないが，ジベタリアンをしている人はその人の自由だからどうでもいい。」と考える児童が少なからずいた。

自分は自分，他人は他人と割り切って，お互い干渉しないという考え方は今の大人社会にも通じるところがある。

実践２電車での飲食について考える　４年生３月に実施

最近電車の中で中，高校生が飲食をする姿をよく見かけるようになった。子供たちに朝の会でそのことを話すと「塾などで遅くなる友達の中にはお菓子を食べる子が結構いるよ。」と教えてもらった。

どうやら中，高校生だけの問題ではないようだ。きっと近い将来，子供たちが考えることであろう。もしかすると道徳の授業で考えたり，また大人に注意されたりしなければ当然してもいいこととして飲食をする児童になるかもしれない。

そこで道徳の時間にみんなで考えてみることにした。

本時の目標
個人の自由と電車でのマナーについて考えることができる
(1) 学習の実際
資料を範読

二人で食べたチョコレート

けい子とあさ子は大の仲良し。同じバスケットクラブの部員だ。今日もクラブを終えて，ふたりは一緒に帰ることにした。
「おなか，すいたね。」けい子が言った。
「うん。あたしも…。」あさ子もさっきからおなかがすいてたまらなかったのだ。
コンビニの前まで来ると，急にけい子が「あたし，なんか買ってくる。」といって中に入っていった。
あさ子が外で待っているとしばらくしてけい子が外へでてきた。
けい子は「帰ろ。」といってなにもなかったように歩き始めた。
あさ子は「何か買わなかったの。」と聞いた。
「うん。買ったよ。でも買ったものはないしょ。」
そういうとけい子はすたすたと駅に向かって歩き始めた。
電車に乗って席に着くとけい子はカバンの中からチョコレートをとりだした。
「これ，おいしいんだよ。あさ子もチョコ好きだったよね。一緒に食べよ。」
そういうとけい子は包装紙をはがし中からチョコをとりだしてぱくりと食べた。
あさ子ももらってチョコを食べた。「おいしいー。」クラブで疲れていたので甘いものがとてもおいしく感じられた。
二人で仲良く食べていると前に座っている人たちがじっとあさ子たちの方を見つめているのがわかった。
「けい子，周りの人が見てるよ。」小さな声であさ子はけい子にいった。
「気にすること無いじゃん。あさ子ももっと食べなよ。」けい子は気にもとめないでチョコを勧めた。
「あたしもういらない。」あさ子が言うと
「あさ子もうすぐ電車，降りるんだよ。座っているうちに食べちゃおうよ。」とけい子がせかした。
「え……うん……。」
あさ子はチョコを食べようか，どうしようか迷ってしまった。

●『電車の中でお菓子を食べてもいいのではないか。』賛成，反対どちらかを選んでその理由も書きなさい。

賛成派　10人
・誰にも迷惑をかけていない。
・自分の勝手
・電車の中で食べてはいけないと言うマナーはない

反対派　26人
・電車の中を汚してしまう。
・飲食は電車の中ですることではない。
・どうしても食べたいなら家で食べればいい。

賛成派から反対派へ
・食べた物をこぼしてしまったらひろえばいいんじゃないか。
・雨が降ったときも電車の中は汚れるのだから食べ物で汚れるのと同じではないか。←自然になってしまうのとわざと汚すのは同じじゃない。

反対派から賛成へ
・本当に誰にも迷惑をかけていないのですか。←注意されたことはない

●先生から賛成派の人へ質問しますが食べかすを落としたらちゃんと拾うという人

拾う　　10人中６人

○電車の中で食べないことはマナーかそうではないかは賛成は反対はどちらも決めかねていたようですので家の人はどう考えているか聞いてきてください。

●最後に将来自分も飲食をする中学生になると思う人

なる　24人　　ならない６人

●もう１度賛成か反対かを自分で決めなさい。

賛成10名→９名　　反対26名→27名

○授業の感想をノートに書きなさい。

(2)　学習の考察

すでに電車での飲食の経験（習慣）がある児童は（３名)「自分たちは食べている人を見ても別に迷惑だとは思わない。だからいいのではないか。」といった論調で自分の問題としてとらえていないようであった。またすでにしているの子供たちは自分たちの行動の正当化を主張しているようであった。

このような子供たちにずしんと響く生きた資料がなかったため子供たちの話しあいは平行線に終わった。

最後の発問では「自分もなるのでは」と答えた児童が賛成派10名を越えて24名になった。

話しあいの中では反対していても将来自分はするかもしれないと考えている児童が多数いたのだ。授業最後の感想の中で

「ぼくはなりたくないけど，もしかするとなってしまうかもしれない。」と書いた児童が10名いた。

「やっぱり，してはいけないとおもう」と書いた11名の児童とほぼ同じ数になった。

電車の中での飲食はマナー違反か，そうではないかということが問題として残ったので「ご家庭の人ならどうするか聞いてくること」を宿題にした。次の日に聞いてみると賛成派の中に「家の人はしてはいけない」といわれたと話していた児童もいた。

家族の人に助言を仰がなくてはいけなかったことに授業の取り組みの甘さを感じた。

３．新しい取り組みを振り返って

(1)　子供たちの評価

アンケートに次のような項目がある

「４年生の３学期に中学生，高校生を取り上げた授業をしました。このような授業を受けておもしろかったですか。」

・おもしろかった　　35人　　・つまらなかった　　３人

「道徳の授業についての感想を自由に書いてください。」には次のような感想が寄せられた。

・ジベタリアンの授業が楽しかった

・悪いと思った方向に進んでいる人を止めてあげようと思った。

・私はそういう人になりたくないと思うときがあった。

・高校生について考えた道徳ではどうしてそういうことをするのかと思った。

・電車の中でどうして食べるのかなと思いました。

(2)　発問の効果

ディベート的な話しあいでは架空の資料を基に話し合ってきたがこの取り組みからはすべて実際の話。それも子供たちが身近に見ていることなので話し合ってる内容をイメージしやすかったようだ。

３つの実践にはすべて同じ発問を取り入れた。

『あなたは将来○○になりますか。』

これは不破教諭のジベタリアンの実践から学んだ。今話し合っていることを架空のことと考えずに自分の将来と結びつけてイメージするのに大変効果的な発問である。

この発問をすることで子供たちは自分という物を客観的に振り返らなくてはならない。

「自分は将来こんな事をするんだろうか」「自信ないな・・・。」この発問は自分の問題として考えることに効果があったといえる。

(3) 予防注射になるか

中学生，高校生の問題行動を道徳の授業で取り上げ考えてきた。小学生の時にこのような問題行動について考えることでこの子たちが中学生，高校生になったときに自分の行動にブレーキをかけることができるのではないかと考えている。

今はまだ答えがでていないが小学生で話し合った学習が将来役に立つと信じている。

欧米では小学生のうちから喫煙，麻薬などの害について学習する。

このように子供たちの近未来を考え，道徳の時間にも子供が遭遇するであろう問題を取り上げる子供たちに考えさせることの意味は大きい。

Ⅵ. 終 わ り に

道徳の授業改革ということで４つの実践に取り組んだ。まだまだ不十分な取り組みではあるがいわゆる道徳の授業から発展した取り組みができたのではないかと思う。

新しく取り組むようになって，道徳のアンテナが貼るようになりいい学習材を開発することができた。

道徳は学習スタイル，学習材をもっともっと開発できるのではないかと実践を通じて感じた。

また，新しい取り組みをするようになり子供たちが「道徳は楽しい」と言ってくれるのが何よりもうれしかった。子供たち自信自分で発言し，友達の考えを聞き，また考える事を望んでいたようだ。

「いろんな友達の意見が聞けるから楽しい。」「正解がないから道徳は好き」という感想があった。その人らしさが現れる生の意見のぶつかりあい，最後は自分で決めなくてはいけない責任感，このような活動が子供たちを魅了したのかもしれない。

教室から外に出て介護の授業をしたことも子供たちには好評であった。教室の外でも子供たちは学んでいく力があるんだなと，改めて感じた。

本実践をするに当たり板橋区立第４小学校の不破淳一先鋭には大変お世話になった。改めてここで感謝したい。

本実践に私と一緒いに取り組み，様々なことを学ばせてくれた４年２組38名の児童にも感謝したい。